

審査員特別賞

日々の暮らしを丁寧に

秋田県立湯沢高等学校 3年

成瀬 流奈

日々送られてくる数々の郵便物の中に、私が必ず目を通す一通の手紙がある。それはミャンマーの支援活動をしているNPO法人からの活動報告だ。この手紙が送られてくるようになって、もう十数年になる。最初はA4の用紙を二つ折りにした4ページほどの簡単なものだった。けれども少しずつページ数が増え、年に一度は詳細な活動内容や収支計算報告も掲載された立派な冊子が送られてくるまでになった。この冊子の重みが、それだけ活動が充実し、団体が大きくなってきたことを物語っている。

もともとこのNPO法人は、ミャンマーの政情不安や軍部の絞めつけによる市井の人々の窮状を知った日本のおばちゃんたちの「何か助けになりたい」との思いから始まったという。当時は今ほどSNSなどのコミュニケーションツールが発達しておらず、活動を広める手段は口コミくらいしかなかった。私の母も、私を出産した時に立ち会ってくださった助産師さんからの紹介で、この団体を知ったそうだ。農家や助産師など、ごく普通の仕事をしている、どこにでもいるようなごくごく普通のおばちゃんたちが意気投合して始めた活動なので、当時は何もかもが手探り状態だったらしい。

その頃まだ幼稚園児だった私にも、はっきりと覚えていることがある。雨の降る肌寒い日、私は母に連れられて、知らない人のお宅を訪問した。そこは新しく立派なマンションだった。室内には数人のおばちゃんたちと若い外国人の女性がいた。そこで母とおばちゃんたちが何を話していたのか、何かしら食事をしたのかなどは、全く覚えていない。ただ、その外国人のお姉さんに輪ゴムを使って指にお星さまを作る遊びを覚えてもらい、お返しに鶴の折り方を教えてあげて楽しく遊んだことだけは、とてもよく覚えている。それは、身振り手振りだけでこんなに楽しく、そして心も通じ合うんだ、ということを実感した初めての体験だった。その時に会った外国人のお姉さんは、ミャンマーのために日本に文化や学習の指導方法を学びに来た女性だった。しかも祖国であるミャンマーで、とても辛い経験をしたのだと、後になって知った。

その頃から「私も何か世界中で困っている人の助けになりたい」「どうしたら私でも役に立つことができるだろう」と常に考えるようになった。特に東日本大震災をはじめ日本国内で起こった災害に寄せられる世界各国からの支援の報道を見聞きするたび、ありがたいと思うと同時に「お返しをしなければ」という気持ちが強くなる。自分たちの国だって大変

なはずの貧困国と言われる国々からも支援が届けられ、その善意の尊さを考えると、いてもたってもいられなくなるのだ。

そんな私の気持ちを察して言葉をかけてくれたのは、私が生まれる時に立ち会ってくださった、あの助産師さんだった。

「焦らなくて大丈夫だよ。何か役に立ちたいと思う気持ちがあれば、必ずそのタイミングがやってくる。あなたの力が必要とされる時が来るよ。それまでたくさんの人から話を聞いて、いっぱい勉強して、心と身体に磨きをかけて、パワーを貯めておいてね」

カナダ在住の彼女は、結婚して子育てをしながら看護師の仕事が続けておられる。一時帰国されて再会したおりに、こうアドバイスしてくれたのだ。一から英語を勉強し、医学的知識や技術の習得にも心血を注ぎ、文字通り血を吐くような努力をして、今の生活を手に入れたという。そんな彼女は私の力強いサポーターであり、憧れの女性だ。

今の私は地方の片田舎に住む、ありふれた一人の女子高生にすぎない。けれど勉強や部活など日々やるべき事柄の一つ一つに丁寧に取り組み、一日一日を大切に暮らしていこうと思う。それが今、未来のために私がしておくことであり、よりよい未来の地球のあり方につながっていくはず、と信じているからだ。